

反転授業・アクティブラーニングに適する授業と適さない授業

実践者：徳島大学大学院SAS研究部 山本真由美

会場：徳島大学共通教育4号館302教室

はじめに

- 情報関連技術が進んだ今日、**大学教員の役割は、もはや出来上がった知識体系を蓄え、伝達することではない。**そのようなことは、インターネットを用いた方が効率的だし、また、そのようなことを時間制約の中で続けようとするれば、最新の知見を全ての教育課程に取り込むことはできないと言われる。
- 大学教育では専門知識の探究から知識基盤社会をたくましく生き抜いていくための**ジェネリックスキル（汎用的技能）の習得に焦点が移り、広義のキャリア教育が求められる**ようになった。ジェネリックスキルの内容は多岐に亘る。例えば、経済産業省の「社会人基礎力」では「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として3能力12要素、すなわち、1）前に踏み出す力（主体性・働きかけ力・実行力）、2）考え抜く力（課題発見力・計画力・創造力）、3）チームで働く力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力）が挙げられている。また、中央教育審議会の「学士力」においては、「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」としてコミュニケーションスキル・数量的スキル・情報リテラシー・論理的思考力・問題解決力が挙げられ、態度・志向性の側面でも、自己管理力・チームワーク（リーダーシップ）・倫理観・市民としての社会的責任・生涯学習力があげられている。

報告する授業の概要

授業題目

- ・自己理解を深める心理学

授業目標

- ・心理学の知覚・記憶・学習・パーソナリティ・社会・発達などの領域での基礎知識を深める。
- ・心理学的観点から自己理解を深める。
- ・グループ内でコミュニケーションができる。
- ・グループで調べたことをプレゼンテーションできる。

報告する授業の概要

授業内容

- ・ 心理学の知覚・記憶・学習・社会・発達などの領域での基礎知識を深めると共に自己理解を深めるためのワークを実施する。
- ・ 授業実施方法として反転授業とアクティブラーニングを取り入れる予定である。

受講者数

- ・ 前期：9/111名
- ・ 後期：19/111名

反転授業とアクティブラーニングの実施方法の紹介

受講者へのメッセージ

- ・ 資料は事前にLMSで提示すると共に紙媒体で配付する。本講義は、講義を聴くと共に受講者同士でグループを作り、そこでの話し合いも行う。従って、座席を指定する。
- ・ 出席は出席記録システムによって行う。カード受付時間 授業開始5分前～授業開始5分後とし、遅刻受付時刻はそれ以降授業開始20分までとする。

評価

- ・ 小レポートは、課題を実施した内容をまとめる。内容から3～1点を配点する。
- ・ 資料作成は、グループで課題について話し合った結果をどのようにまとめているかについて3～1点で配点する。

反転授業とアクティブラーニング の実施方法の紹介

反転授業

- ・ 予習として使う方法
- ・ 完全習得学習

□ 本授業では、前者を想定した。前期の受講生も後期の受講生も、最初に授業の方法を説明した際、心理学を専門とするのではないので、反転授業をする時間を専門の勉強に使いたいという意見がほとんどであった。そこで、反転授業は実施しなかった。

反転授業とアクティブラーニング の実施方法の紹介

- I(Issue) : 課題は何なのか, 何を議論するのか。→忘れる(忘却)ことは, 良いことか, 悪いことか。
→忘れることは良い場合であることもある。
- R(Rule) : 課題を解決するための仮説を立てる。
- A(Application) : Ruleで立てた仮説に具体的な場面での事象や出来事を当てはめて実証する。
→**確かに**忘れることでうまく対応できないことがある。**しかし**, 忘れることで嫌な記憶をいつまでも思い出さなくてすむこともある。
- C(Conclusion) : 仮説に当てはめて導き出した結論を最後にまたわかりやすく締めくくり結論を出す。
→したがって, 覚えていることで精神状態が悪くなることがあるとすれば, 忘れることが良い場合もある。

課題は, 授業実施者が提示し, 課題に基づき, IRAC法を用いて, グループで考え, 話し合った。それを4項目別にレジメとしてまとめた。まとめたものをグループごとに発表し, 発表内容, 発表方法について評価した。

現時点での感想 受講生への質問紙結果から

質問内容	%	解説
アクティブラーニング授業	100	本授業はアクティブラーニング授業であると認識している
グループワークがあることは良い	100	グループは4～5名/1グループである
教師はしゃべりすぎる	6	教師がしゃべりすぎてアクティブラーニングにならない授業があると言われているので、確認した
課題はアクティブラーニングに合っている	100	授業では、話し合いの課題を与え、IRAC法でプレゼンテーションすることとした
グループでの話し合いは適切	75	グループでの話し合いに参加しない人がいる
プレゼンテーションのやり方は適切	94	実物投影機でなく、WordやPPTでのプレゼンテーション
振り返り方法は適切	81	いくつかの評価項目を作り、チェックする方式が良い
振り返り時間は適切	63	振り返り時間をもう少し長くしてほしい

現時点での感想 受講生への質問紙結果から

質問内容	%	解説
考える力がついた	69	2/3がそう考えている
話す力がついた	56	半数がそう考えている
聴く力がついた	31	1/3がそう考えている
まとめる力がついた	56	半数がそう考えている
心理学の知識がついた	50	半数がそう考えている

回答者は、男性が81%,女性が19%である。回答者の学年は、1年生38%, 2年生25%, 3年生38%であった。

現時点での感想 まとめ

- 本授業では、心理学の理論を素材として、グループワークを実施することに重点を置き、論理的に考える手法として「IRAC法」を用いた。
- 心理学の授業としては、受講生数が少なかったが、グループワークを実施し、プレゼンテーションをするには適切な人数であったと考える。
- 今後は、心理学の知識を身につけるということとアクティブラーニングをバランスを取りながら授業を行っていく方法について、検討していきたい。